巻頭言

手塚信吉

保守党内の移動にすぎないが、佐藤長期政権にいささか倦怠を感じていた国民は、若さと新鮮さを買って角さん総理を一斉に歓迎した。だがそれは未知数の期待であって、その力量も真価もお代は見てのおかえりというところであろう。

角さん総理と云えば、こんな平常時に学歴も閨閥もなく、貧農の家に生まれ、一青年代議士を振出しに政界遊泳二十五年、智謀か機略か幸運か、政治経済両全、出監の誉もたかく、遂に群雄を抜いて宰相の栄冠。世間はこれを昭和の太閤と讃え、今藤吉郎と囃し立て、羨望渇仰しきりであるが、まさか角さん自身はそんな出世亡者の代表気分で有頂天になるほど甘くはあるまい。

国民が角さん総理に期待するものは、まず平和憲法に活を入れて、主権在民、民主々義日本の確立である。今の日本はあまりにも非民主的不平等社会化しており、子弟の教育までが、出世主義、抜けがけの功名主義、排他主義万能であり、それが青少年の純心を蝕み良心を麻痺させ、凶悪犯罪にもつながっている。こんな現状をそのままでは、隣りの国でも心を許して交友できないであろう。

何をさておいても、角さん総理が全力を傾倒すべきものは、日中国交正常化である。今の世界状勢からみて機を失することは悔を後世に残す恐れがある。そして角さん総理の立場では日中問題の五〇%は国内問題であり、党内操作の苦心であろうが、勇断に政治生命を賭ける気迫が必要である。

また物欲本意の国民からの非難を覚悟で、満州事変以来日本人の中国大陸で犯した罪の総決算に勇敢であって貰いたい。厳然世界に知れわたる日本軍兵の残虐蛮行の犠牲者、幾百万人の慰霊の為の賠償金出し惜みをするな。正邪善悪のケジメを曖昧にして精神的復興はあり得ない。民意を失って大陸を去った将介石将軍の政略的声明の陰にかくれて、戦犯責任を免れんとしても筋が通らない。何よりも人類の良心が永久に許さないであろう。

テルアビブ空港乱射事件の犯人が日本青年と確認するや、直ちに賠償金を持参した謝罪使節を派遣したことは正しい。無垢の婦女子幾百万人を惨殺した罪滅ぼしに、中国大陸横断新幹線鉄道建設寄贈申出書ぐらい持参して、総理自ら謝罪使節として行って貰いたい。

苦労人の角さん総理なら、命がけの革命家であった中国要人とも人情の機微にふれて話合いができよう。存外有無相通じて妥結も早かろうが、日中国交正常化の交渉は敗けることが勝つことであり、日本国民の不評を買うほど将来の日本にプラスになる。あり余る外貨の処置を誤ると、円価の再々切上げに追込まれて日本経済は破綻する。その外貨の有効使途を日中国交正常化、経済提携に活用することは日本のために賢明である。

今日の日本に必要なものは外貨でもなければ経済的繁栄でもない。崩れた精神文化再建のため、臥薪嘗胆十年の試練である。それが理解出来る人物が角さん総理であると確信する。奢る平家の二十年、昭和の清盛入道となるなかれ。他人や他国を踏み台にして富み栄えんとした資本主義時代は終っている。これからは国でも個人でも対立に滅び協力に活きる協同体時代となる。日中提携の楔となるものはその協同体の思想である。今の日本人に理解を求めることは、飲みたくない馬に水を飲ませるほど難しい。さてどうしようか。

老人問題と協同体社会

手塚信吉

日本人の平均寿命が、七二才強。六〇才以上の老人が、近く総人口の二〇%、すなわち二千万人に達し、二〇年後には三千から四千万人ともなり、日本は老人国となる。もはや老人問題は単なる老人の問題でなく、国民生活そのものとして再検討の必要にせまられている。勿論、思い切った老人福祉政策は緊急であるが、国力を傾けても老人の一〇%を救うのは容易でない。また、人間だれしも人生の三分の一を老人として生きる。そのための三〇年、五〇年先の経済安定など不可能なことは過去の実績が示している。個人主義に個人の安定なし。人類は協同体なり。不変の真理に忠実であれば活路もある。キブツ協同体社会は日本人の生方にも参考となるであろう。

人生五〇年哲学からは
老人問題の英智は生まれない

平均寿命が男七〇才、女七五才と、世界でも一、二を競う長寿国となった日本が、人生わずか五〇年といい、七〇才を古来稀なりとした。明治・大正時代の政治政策も、社会の仕組もつじつま合わないのは当然である。古来稀であった七〇才の老人に対してさえ、ろくな待遇もできなかった日本の政治・経済性格や体制をそのまま、人口の二〇%、三〇%にも達せんとする老人の大洪水に対処することは、思いも及ばないことであろう。

老人福祉政策の最も進歩している北欧スエーデンが、世界一の老人自殺国であるという皮肉な現象をみても、人間は物質的にどんな

に恵まれても、心の安定を得なければ幸福ではない。政治の手の届くところは物の範囲内であって心の分野には及ばない。また人生の幸福は与える中にあって、与えられる中にはないという不思議な神の摂理が働いているので、誰でもなんらかの社会的役割を果たすところに救いもあり、生きがいもある。そして生きがいを失った人生は生きたムクロにすぎない。スエーデンに老人自殺の多い理由がわかるであろう。

だから、どんな立派な老人ホームに迎えられて栄養満点の美食で待遇されても、そんな与えられた物質的恩恵からは、生きがいも、幸福感も、味わえるものではない。田中新内閣は、生産第一主義から、生活第一主義へと国策転換をひょうぼうしているのだから、立ちおくれた老人福祉対策にも思い切った手を打つであろうが、およそ政党政治というものは哲学も宗教もなく、圧力団体で動かされやすい政治であるから、老人福祉政策などは陽の当らない政策のひとつであろう。最重点政策のひとつとなったとしても、せいぜい老人ホームや老人病院の増設とか、鼻薬程度の老人手当増額ぐらいがせいいっぱいであり、生きた老人国策とはほど遠いものであろう。

角さん首相なら下情通も藤吉郎並みであろうから、一般老人の立場にも理解があろうが、老人問題は老人福祉とか、救済とか、そんな消極的な対症療法だけで解決できる段階ではない。人生再建という大構想で、人間社会そのものの再検討の必要がある。

明治以来百余年、資本主義的な老後対策は民間事業としていろいろあった。生命保険も、定期預金も、停年退職金も、それぞれ性格の差こそあれ、老後のそなえであったが、結果はすべて倫理観からみて詐欺行為にすぎなかった。

これは搾取や不労所得を根本性格とする資本主義経済への依存では、三〇、五〇年後の老後の保証とはなりえないことを立証している。参考のために、過去の実績として、保険、預金、退職金それぞれの欠陥を指摘して意見を述べ、参考に供したい。

老後対策の一

「養老保険に騙された」

生老病死苦は人の世の常、弱い個人だ。わらにもすがりたい気持である。その自衛手段として、安月給取りでも妻子をもてば老後にそなえて、無理をしてでも養老保険のひと口に加入した。それで不慮の災難に救われた人もあるにはあろうが、まれのまたまれであって、九九％以上のものは満期丸がけ丸損に終っている。

友人のA君が妻帯して借家住いをはじめたのは、大正三年七月であり、すすめられて養老保険、契約高一千円の保険に加入した。今日では千円の金は子供のこづかいであるが、あの当時千円あれば、白米二百俵買えた。借家が三戸も建つ資金ともなった。大学出身者の初任給が二〇円、中学卒業者が一二円、労務者の日給が六〇銭は上の部であった。

借家の家賃が五円で、八畳、六畳、三畳、台所、風呂場もあった。それでも毎月二〇円の月収で親子三人がなんとか生活できた。だが、毎月末の保険掛金二円三〇銭の支出ではずい分無理をしたものであった。そのために質屋通いもしたし夫婦げんかもした。さて養老満期が昭和一九年であった。受取った千円の保険金は大学三年の次男の一回の月謝にも足らなかった。

もうひとつ私自身の保険加入の実情を述べると、大正一〇年、初めてすすめられて五千円の養老保険に加入したのを手はじめに、義理の加入が前後一五年間で契約高一〇万五千円となり、当時としては高額被保険者の部であり、定期健康診断も受けられたが、昭和二二年、財産税申告書に書入れられて、実掛金五万三千円に資産税を課税され、そのうえ翌年一〇月には、保険事業保護の特令が立法化して、保険契約高は最高二万円を限度として打切られてしまい、あたら高額契約者も、三〇年間の賽の河原の石積みに終った。

敗戦という異常時代のこと、保険会社も深傷を負っているならあきらめもするが、関係保険会社はことごとく大々敗戦成金で、土地持ち、株持ち、大成金。含み資産七千億円ときくが、その保険加入者は最高二万円で切捨てごめんでそのままである。まさに公認された詐欺事業であろう。

老後対策の二

「定期預金も罪つくり」

昭和五年は浜口内閣、金解禁、緊縮政策、勤倹貯蓄の声は全国をふうびした。吾社もその国策に協力して、社員一同一〇年計画一万円積立定期預金の励行となった。当時一般社員の月給三五円、労務者の日給七〇銭、玄米一俵が五円五〇銭であった。当時一万円の預金があれば年六百円の利子がつく。六百円の月割五〇円あれば中流以上の生活ができた。それを目標に禁酒、禁煙、家計費の節約と、みな一生けん命であった。

働く外に金もうけのすべを知らない労働者、老後を考えて涙ぐましいまでに節約、貯金をしたが、大半のものは中途で挫折した。最後まで貫徹したのは二、三人にすぎなかったが、その中の一人に倉庫係の今井誠二君がいた。正直一途の律義者だけに定期預金証書をいつでも腹巻に入れて腰に結びつけているので評判であった。その今井君にも、敗戦日本のインフレは遠慮なくおしよせた。手持ち定期預金一万七千余円も、昭和二七年ころになると闇米四俵の価値しかなかった。

命とも、生きがいとも頼む二〇年間苦心の貯金。もう一度立上る勇気のない六〇才。諦観するほど心の余裕はない。じいさん気が変だぞと気付いた者もあったそうだが、私が知ったのは覚悟の死を選んだ後であった。あの当時、同じ悲劇の主人公が日本全国には何百万人あったことか。銀行制度も罪なものだ。

さて、その貯金を預った銀行はどうか。銀行まで破産して貯金も紙くずになったのであればあきらめもつこうが、そんな銀行は一行もない。貨幣価値が千分の一、万分の一になろうと、一万円は一万円、それだけ払戻せば責任はない。そして銀行さんはデフレでもうけ、インフレでもうけ、どっちに転んでも肥るだけ、繁華街の街角は銀行で埋めつくし、豪壮華麗の偉容を誇り、堂々飛躍発展の不思議。その銀行の昨年度末預金高七兆何千億円、含み資産が八千億とも九千億ともうわさされている。

真正直に働く労働者、汗と涙の一五年、二〇年の血の結晶、老後にそなえた命の縄、一度崩れて再起するには年が許さない。預金者は丸損する、銀行は無限大に肥大化する。満満足でほくそえんでいる一握りの大資家や資本主義支配階級は銀行法規で許されるとしても、老後にそなえる労働余剰貯金の価値の維持には国家が責任を持

つべきである。

中華人民共和国は一九〇九年一〇月、赤土と裸の国民五億人とを土台に誕生した。そんな中から立ち上りながら二三年前に制定した主要生活物資の公定価格は一定不変で寸分の変動もない。違っているのは物が豊富になっただけ。これでこそ労働者も安心して貯金もできる。老後の安定も生まれてくる。資本主義日本の銀行は公認された詐欺機関にすぎない。

老後対策の三

「無慈悲な停年制と退職金」

日本には約四千五百万人の賃金取りがいるが、老後の不安に脅えない人が何%あるであろうか。一体何のための就職か、何のための労働か。生まれて二〇余年親のヤセズネをかじって学校卒業、やっとの思いで就職しても家庭的に自立できるのは三〇才以上。今度は自分のスネをかじられながら子供の二、三人も教育するうちに、またたくまの二〇年、そろそろ停年退職の不安におののく年頃。

ちょうどそのころから娘の結婚、せがれの嫁取り、先の不安を感じながらも、恩愛に引かれたり世間を考えたり、退職金前借もして、少々無理もする。気のゆるみか疲労の蓄積か夫婦のだれかが病気をする。急に初老を感じだす。お情け一年加えて満六六才停年退職、貰った退職金が手切れ金。あとは無収入の物価高、インフレに毎日脅かされながら二度の勤めの職はなし。この先一〇年も生きたら大変なことになると思うと、毎日が大恐慌の連続である。そして生きたムクロを持て余している老人のなんと多いことか。

老後対策の四

「金持も老後の安全なし」

孔子は、国乱れて忠臣いで、家貧しうして孝子いづ。真人間を子孫に望むなら私財などたくわえるなと教えている。キリストは「貧しきものは幸いなり、天国はその人のもの。富めるものが天国に行くはらくだが針の穴を通るほどむづかしい」と戒めている。歴史が教えている人の世の盛衰興亡をみると、おごる平家は二〇年、一代の豪商、紀の国屋文左衛門も栄華の夢はわずか八年、銭屋五平はたった五年で悲劇の主人公。食えないほどの貧乏も困るが、金持必ずしも幸せではない。

金もない人からみると大変な魅力であるが、ある人の身になると盗られる心配、減る心配、悩みの種が増すばかり。命とりの業病である癌、脳卒中、心不全、糖尿病等、貧乏人には寄り付かないものばかり。癌で苦しむ金持から健康無類の貧乏人をみると、キリストの教えが身にしみるであろう。今の日本には過飲過食が原因の病人が五百万人、粗食栄養失調患者はほとんどゼロだという。必要以上の私財をたくわえるとたいてい子孫を不幸にする。経験談ひとつを書き加える。

事業経営に金融はつきもの、大体は銀行が相手であるが、その銀行にも限度枠があって手形割引ができないことがある。そんなとき少し金利が高くても個人の金融業者を利用する外はない。たいていの事業家はそんな個人金融業者の一両人は知っている。私の出入りしていた高利貸に横山という人物があった。もっとも無担保で手形

割引をするのだから、高利も当然であるが、私は日歩五銭以上支払ったことはなかった。一流手形ならほとんど銀行並で割引させたこともあった。段々親しくなって、家のことまで打ち明け話をするようになっていた。

金持の子供に親孝行のないことは孔子様がちゃんと教えているが、横山さんのせがれたちは兄弟三人ともお粗末であり、時々こぼし話も聞かされていた。その横山さん、いまだ六二才というのに突然脳卒中で倒れてしまった。それでも道楽息子たちは看病どころか家に寄り付きもしない。病床を見舞うと涙で枕をぬらしながら、ろれつのまわらない口元をゆがめての人生への未練、家庭の内情の訴えとを耳にするのがたまらなかった。

そして金持ほど人間への警戒心が強く、肉親にさえ不信感を捨てきれず、金物のように心が冷たく淋しく、なんとなくいやな気持であった。死去されたのは二年後、会葬には列したが遺族との交際はなかった。うわさに聞くと、遺産争いが脱税さわぎにまで発展し、血族たがいに血を血で洗う大げんかざた。悪質弁護士の食物になり、五年がかりのお家騒動、下高井戸にある墓地もペンペン草が生繁っているそうだ。これが億万長者の末路である。数えあげたらきりがないほど、大同小異の金持の悲劇を知りすぎている。金持になれば老後が安定すると思うあやまりを犯すべきではない。

老後対策の五

「賃金闘争から老後対策は生まれない」

明治以来日本の産業労働者は、過剰労働力の影響もあって薄給と酷使に泣かされてきた。そして、団結力がなく資本主義経済の搾取にあまんじ、血の犠牲も払わされてきた。その間にも先覚の同志たちが資本主義の圧迫に耐え、官憲の弾圧に抗して、労働大衆の啓蒙に努めてきた。終戦後急にアメリカ民主々義の影響を受けて思想の飛躍があり、工業の発展、労働人口の激増、そして年中行事の労使対立闘争が次第に労働者の団結に役立ち、労働運動五〇年にしてようやく産業支配勢力として、労使は対等の立場に成長した。

ここまで成長すると、労働者よ団結せよ、だけでは労働者の真の安定も老後対策も生まれてこない。いたずらに労使を対立関係のまま、賃金闘争や無理な待遇の改善要求のみに団結したエネルギーを消耗することは、反って自縄自縛の愚を犯すことになる。その悪例がイギリスにある。イギリス労働界の団結は一国を左右する力がある。だが力の圧迫が産業界を萎縮せしめ、二流国に転落しつつある。この傾向はすでにアメリカにもあらわれだしているが、日本の労働界は自らの首を自らしめる愚を犯すべきではない。

勿論、生活の向上に賃金上昇も必要である。働くものの健康を守るためにも、文化の恩典に浴するためにも待遇の改善も必要であるが、角を矯めて牛を殺す愚を絶対に犯すべきではない。労働運動といい、社会改革運動といい、要するにまじめに働く階級が安定した生活を保ち、文化的な生きがいある人生を送りながら老後の不安もない経済力を得たい、それが大半の人々の念願であろう。

ところが、前述の「老後対策五項目」のとおり、養老保険に加入しても、定期預金を実施しても、勤続三〇年で停年退職金を貰ってみても、老後の安定に役立っていない。仮に賃金が二倍になっても、それは物価が二倍になるだけで、そんな資本主義的な対立闘争原理

からは人生永遠の安心立命など生まれるわけがない。

それは人間の利己心に結びついて搾取と不労所得を根本性格とする、資本主義経済に人間が奉仕しているからである。国家資本にせよ民間資本にせよ、資本は人間に奉仕すべきものであって、人間が資本に奉仕すべきではない。この点、だれでも解ったようで解らないのは自らの利己心にまどわされているからである。

資本というものは安全性のあるところに自然と集まる性質のもの。もし労働組合の団結が固く協同協力体制が確立して、一糸乱れぬ統制力のある組織体であれば、水が低きに流れるように、国家資本でも民間資本でも、どんどん流れ込んでくるであろう。それを如実に立証しているものがイスラエルのキブツ社会である。労働組合の目標をキブツに置けば道は自ら開ける。

老人問題解決の鍵は
協同体社会にある

世間では老後問題の自衛策には、養老者保険とか、定期預金とか、退職金の増大とかを考える。国策的には老人ホームとか、老人病院とか、老人年金など物的救済策を考えるが、日本人の平均寿命が七二才にもなり、総人口の二、三〇%が老人となると、そんな消極的な物的救済策も必要ではあるが、より重要なことは人口の三分の一にもあたる老人の人生行路をどう活かすかの問題がいっそう大切になってくる。国力を傾倒しても二、三千万人の老人達に満足を与えるような物的救済などできるものではない。

さきに老後対策五例に述べたとおり、三〇、五〇年後の老後対策を変転常なき経済速度の中で依存せんとすることそのものに無理がある。何度もくり返して述べたように、資本主義経済はもともと不労所得を根本性格とするもので、常にかんまんなインフレ下においてのみ維持できるものであり、汗水たらして得た勤労の余剰所得を保管する能力はない。老後の生活にそなえた零細貯金のインフレ紙くず化、あまりにも冷酷な資本主義ではある。だから、そんなわなから脱出を考えたものが協同体社会である。

もともと人間は社会性の動物であり、協同協力の中で安全が保たれたのであるが、社会秩序の恩恵に慣れて個別生活を求め、自由主義競争社会におのおの私欲の追求に偏し、結果として貧富の差、幸不幸の差、千差万別不平等社会を形成した。これを経済秩序として認めたものが資本主義経済である。

だが世界の人口は激増する。資源は枯渇する。海も空も汚染にまかせて利潤の追求に余念がない。こんな無秩序な自由競争に放任することは、文化の発展どころかついには人類みずからがみずからの墓穴を掘るに等しい結果となる。そして何の得るところもないことは事実が明確に教えている。協同体の思想はそこから芽生えているといえよう。

資本主義的自由競争下に国民生活を任せて落伍者だけを福祉政策で救済することも、世界の人口が六億人時代は通用もした。百年前のアメリカは人口わずか五百万人足らず。開拓促進のためには自由競争に任せることが必要でもあった。

世界の人口は百年前に六倍に増加し、昨年度の国連発表によると三五億八千万人、さらに三〇年後には八〇億を突破するであろうと

推定される。資源保護のためにも自由競争は許されない。協同体化の必要はここにある。

老人問題の解決もその活路を協同体社会に求めることにより、一円の国庫負担も必要としない。そして、人びとそれぞれ安心立命の境地を得て、生きがいある人生をまっとうすることもできる。それを六〇年の実績により雄弁に証しているものがイスラエルのキブツ協同体社会である。

既に六〇余年の歴史
協同体社会キブツ

当協会では本年四月四日、第九回キブツ研修生七四名をキブツに派遣し、目下研修中であるが、キブツ研修生の派遣は一九六五年以来すでに三百余名を送り、新時代の人間社会の生活原理を日本青年男女に修得させているのであるが、世間には偏屈な見方をする者があって、中東紛争に結びつけて、労務援助に日本青年を送っていると曲解して批判するものもあるようだ。それこそとんでもない話であって、キブツ協同体の新時代的なあり方が今の日本のゆきづまった農業や中小企業者の活路として大いに学ぶべき価値を認めて、辞を低くして教えをこうべく、一〇年前から毎年派遣しているものであり、純粋に文化交流の範囲のもの、政治・外交的な意図は寸分もない。日本はアラブ各国とも、イスラエルとも親善友好の関係にあり、アラブ諸国は世界的産油国で日本は世界第一の石油輸入国であり、日本人経営の油田もあり、多数の日本人青年技術者もアラブ各国で働いている。イスラエルのキブツ社会に研修中の日本人青年男女もこれらと全く同じ立場にすぎない。

さて、私が一九六二年初めてキブツを視察してその真価に着目し、その普及のため日本キブツ協会を設立して一一年目、キブツの名はもはや全国的に知れわたっており、青年男女の間にキブツ熱が盛んであり、研修生も増加の一途をたどっているが、そのキブツの思想は今日の日本にますます必要不可欠の重要性を持ってきた。また、日中国交回復も近いであろうが、中国を理解するには人民公社を知る必要があろう。その人民公社の思想精神を理解するためにキブツ思想は大きく役立つであろう。この意味でも日本の新聞界などまじめにキブツのなんたるかを理解してもらいたい。

キブツは一九〇九年ロシアから移住してきたユダヤ青年男女一二名により、ヨルダン川畔の荒地を開拓した、デガニヤが最初であった。すでに六〇余年の歴史を重ね、その最初のキブツデガニヤも今は総人口八〇〇名に増加し、ゴルドン記念館で有名なキブツになっている。キブツは現在では大は二千人ぐらいから、小は百人ぐらいまで、大小二五〇集団、その人口は一〇万人程度であり、主として徹底した大規模大農方式の協同農業であるが、兼業として工業、輸送業、観光事業等にも進出し、特に地区協同企業の近代設備などみるべきものがある。

元来キブツは欧州系ユダヤ人の知識階級中心の理想社会をめざす集団であって、徹底した民主々義社会であり、人間平等観と労働尊重とを二本の柱とする完全な協同社会であり、資本主義経済下であらゆる資本主義の欠点を協同一体化の中に活かし得た、注目すべき新生活原理の実践社会である。

そしてキブツ社会は開放的であり、だれでも加入も脱退も自由であって、二千人のキブツでも長と名のつくものはひとりもいない。すべて全員総会の多数決により選任された二年交代制の委員によって運営されている。全員が経営者であって全員が労働者、仕事の上でも監督者も指導者もいない。ただ仲間の申合わせにより、各自の良心により、その能力に応じて働くのである。勿論、労働に賃金はない。それでも勤勉なこと驚くばかりである。

キブツは集団生活も特長のひとつである。地形によって多少の違いはあるが、どこのキブツでも広い中央センターを設け、大食堂を中心に適度の間隔をおいて、保育舎、子供の家、老人ホーム、診療所または病院、喫茶室、図書館、研究所、プール、運動場などがあり、別区画に林間に点々と小学校、中学校、高等学校、及びその付属設備がある。その周囲に整然と夫婦住宅が建ち並び、どこの家からでも中央センターに三分か五分以内に往復できるように設計されており、まさに理想の文化公園都市である。

キブツでは男女ともに一日八時間、一週六日間はだれでも分業により、それぞれの職場で働くが、あとはまったく自由時間であって主婦といえども家庭の雑事もない。それは、掃除、洗濯、裁縫、食事のしたく、育児、幼児の世話までも分業により労働時間内、及び当番時間内にやってしまうからである。

キブツ協同体社会の内容をみると、いま世界中の国々で社会問題として悩み苦しんでいる難問題を、鮮かに解決した理想の社会となっている。すなわち、貧富の差を解消した。男女同権婦人解放、育児完全保育、農村過疎対策、農村医療問題、老人対策、文化教育問題など、ほとんどの矛盾、不合理、不経済を解消している。その中でも人生最大の悩みである老人問題を鮮かに解決している。

老後対策にキブツは名解答を与えている

キブツの家庭生活は夫婦単位であるから、老夫婦も単独の夫婦住宅に住んでいる。それゆえ核家族問題も新旧意見の衝突もない。だが別居であっても隣り合わせの生活であり、出入も自由で、三度の食事も大食堂で食卓を同じくするので淋しくもない。老人がひとりとなれば老人ホームに入るが、そこには担当の世話係が付添って面倒をみてくれる。病気になればキブツの病院があり、医者も看護婦もキブツメンバーであり、同志であるから親身になってみてくれる。だれでも絶対平等公平であるから不快感も不安感もない。

キブツ社会の秩序は平等と古参順で保たれるので結果的に老人優遇となるのだ。たとえば、新築住宅計画にしても、予算の関係があり何百戸を一度に建てることはできない。毎年五〇戸とか百戸づつ新築することになる。そこに住む優先権利を古参順にしている。それは家庭電化でも衛生施設でも同じである。結局これが一番公平な方法とみなされている。

キブツでは男六五才、女六〇才以上は労働の義務はないが、農業に年令なしで健康である限り七、八〇才になっても自由に花造り、盆栽造り、庭園の草取り、植樹の手入れ、趣味の工芸品、編物小細工物など、なんでもやっているが、いずれも他人に喜ばれたり、感謝されるので働くことが毎日楽しい。

キブツでは私有財産をだれも持っていないが共同の財産は何一〇億とある。私有財産というものは盗られる心配、減る心配、なくなる心配と年中苦労の連続であり、それでも五〇年以上保持した例は稀であるが、共有のものは共同の力で保存しやすいから不安がない。そして堂々たる大食堂や文化施設をみるたびに共同共力の偉大さに感服しながら、自分のものではないが自分たちのもの、そこに言い知れない誇りを感じ満足感を味わう。白鳥さえずる広い中央センターを早朝散策する老人たちの、生きがいを満喫し確信にみちた姿は、個人的な億万長者の狐目爺とは比較を絶した楽しみであろう。

そしてさらに決定的なキブツの老人たちの幸福は、人生の終点まで老若男女渾然一体の生活社会におのれをおくことができる点にある。社会の姿は千古不変で常に若々しい。そのルツボの中に溶けこんでおれば老人も老を忘れ、老を感じない。だれでも自分の顔は自分に見えない幸せがある。

いくら立派な殿堂伽藍のような老人ホームに収容され、山海の珍味嘉肴でもてなされても、右をみても左をみても老人ばかり、廊下に出ても食堂に行っても老婆と老爺、会う人みなよぼよぼとぼとぼ、そんなところに三日も暮らしたら精神的にもぼけてしまう。政治家は自分が入る気がないから世間ていのよい老人福祉を歌文句にしているが、そんな施設は気分的には姥捨山の外の何物でもない。

老人問題を老人の問題としてとらえている間は政治も嘘、社会も本気ではない。人生成年期の半ばを支配する老人対策は幼児教育から考えるべきである。へんな利己主義教育など全廃した方が神の子人間、自然にそなわる性善本能が人間社会の助け合い気運を強め、協同連帯社会を生み、キブツのような老人天国が実現するであろう。

個人主義思想では老人問題は打開できない

総人口の二、三〇%にも増加せんとする老人を非生産的な福祉政策などで救えないことは、小学校の算数でも計数的に解明できる。各自が個人主義的に老後対策を焦るほど他人を傷つけるだけで、本人の安定には役立たない。それは本文前章で述べた通りである。何千人という人々を搾取したり犠牲にして、仮に一億円の貯金ができても、三〇年、五〇年後の老後対策とはなりえないであろう。それは過去の実例からでもわかる。今の日本経済は理論的にどうあろうと、実際には数字の遊戯にすぎない。戦前の億万長者といえば五指で数えるほどしかなかったが、今の億万長者は全国津々に充満し、ちょっとした農家でも商家でも土地持ちなら全部が億万長者、一〇億、二〇億長者もめずらしくない。だが、日本は領土は半減し資源もない。実質的な富は寸分も増加していない。

外貨の保有高一六〇億ドル。国費をまかなうには一年足らず。貿易が逆潮になれば二、三年で消滅する。そして根本的な誤りを犯しているものは、国土も資源も貧弱な日本がアメリカをまねての乱費経済全盛である。これこそ営利経済の罪悪性であるが、天は必ず日本の不謹慎を厳罰に処するであろう。

個人主義、今日主義の幻の経済日本に三〇年五〇年後の老後対策に役立つ保証はない。キブツ協同体社会を参考に、理想の日本的キブツ社会を造りましょう。